

これまでに、フランス啓蒙思想活動のひとつとして、『百科全書』の作成活動を取りあげてきました。それまでの、知的権威を否定し、自由な考察による知識の進歩と共有をもとめたものであり、近代社会の幕開けを告げるとともに、近代教育の指針となったに違いありません。そこに、参加した人々には、どんな想いがあったのでしょうか。ここにそのひとり、ジャン・ル・ロン・ダランベールの述懐を『百科全書』の序論⁽¹⁾からあげてみましょう。

私たちが、さまざまな学問をうけとったのはイタリアからであり、それらは以後ヨーロッパ全体であれほど豊かに実を結んでいる。しかし、私たちがとりわけイタリアにおかげをうけているのは、さまざまな芸術とすぐれた美意識とであり、イタリアは真似のできないその手本を数多く私たちに提供してくれたのである。

芸術と文学とがすでに尊敬されていたのにひきかえ、哲学は、少なくとも各国民を全体としてながめた場合、同じ進歩をしているどころではなかった。哲学が再び姿を現すことができたのはひどくおくれからなのであった。実際は、文学に秀でる方が、哲学にそうであるよりもたやすいというわけではない。どんな分野でも、卓越することは同じように達しがたいものである。

しかし、古代人たちの書物を読むことは、当然、自然科学の進歩に寄与するよりも早く文学とすぐれた美意識との進歩に寄与したはずである。文学的な美しさは、感じとられるのにながく見られる必要はなかった。

そして、

人々は考えるより前に感じとるものであるから、当然同じ理由で、自分が考えるものを評価する前に、自分が感じとるものを評価するはずである。その上、古代人たちは、作家としてほどには、まだまだ哲学者としては完全ではなかった。実際、たとい私たちの観念の順序において理性の最初の働きが想像力の最初の努力に先行するとしても、後者は、それが第一歩をはじめてからは、前者よりもずっと早く進むものである。



フランス:百科全書の表紙絵⁽²⁾



イギリス:百科事典の表紙絵⁽³⁾

-
- (1) デイドロ、ダランベール編 桑原武夫訳編『百科全書-序編および代表項目-』岩波書店(1971)
 (2) デイドロ、ダランベール編『アンシクロペディ乃至は技術と科学についての総合的な書巻』(*Encyclopédie ou dictionnaire universel des arts et des sciences*) (1751-1772)
 (3) エフレム・チェンバース編『サイクロペディア乃至は芸術および科学の総合的な事典』(*Cyclopaedia, or An Universal Dictionary of Arts and Sciences*) (1728) ※この表紙絵は、「世界で初めての百科事典」として紹介するため(Art&Science)のテーマ図柄として拝借させていただいています。

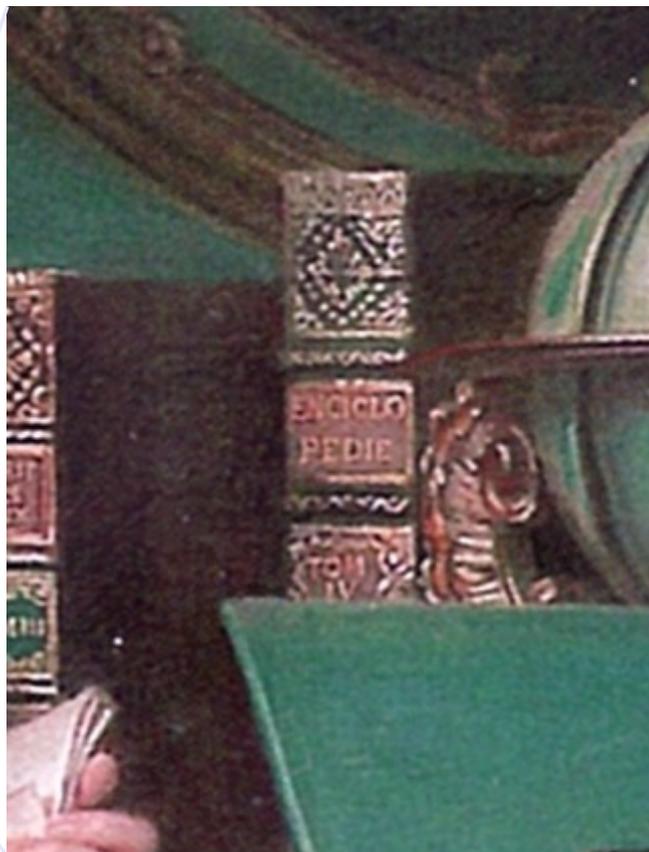
ポンパドール侯爵夫人の支え

Madame de Pompadour, 1721.12.29- 1764.4.15 本名:ジャンヌ=アントワネット・ポワソン
(Jeanne-Antoinette Poisson)

パリの銀行家の娘として生まれ、平民という身分ながらブルジョワ階級の娘として貴族の子女以上の教育を受けて育つ。1741年に徴税請負人のル・ノルマン・デティオールと結婚。サロンに出入りし、ヴォルテールやフオントネルなど知り合う。1745年9月14日正式にルイ15世の公妾として、ポンパドール侯爵夫人を名乗る。



モーリス・カンタン・ド・ラ・トゥール 1755年 ルーヴル美術館蔵



彼女は、サロンを開いてヴォルテールやデイドロなどの啓蒙思想家と親交を結び、彼らの編んだ『百科全書』の普及を支援し、自らの書斎にそれを置いた。肖像に添えられた書物はその書巻の一部である。(図上の罫線での囲みにアンシクロペディ=百科全書と読める) 喜多村 編集

1756年、彼女は、権勢のない夫、ルイ15世に代わって政治を執りしきり、オーストリアのマリア・テレジア、ロシアのエリザヴェータと通じ反プロイセンの同盟を結成しました。このとき、オーストリアとの和解ができたことによって、マリー・アントワネットがフランス王室に嫁ぐきっかけとなったのです。

彼女は、多岐にわたる文化人との交流をもち、ときに、哲学者、魔術師、作家そして劇作家として立ち働いたジャコモ・カサノヴァとの親交をもったことを題材に、『カサノヴァ・夢のかたみ』として1994年、宝塚歌劇団によって空想の恋物語が演じられている⁽⁴⁾ほどです。

(4) 小池修一郎 作「小池修一郎の部屋」(<http://www.geocities.co.jp/Hollywood-Kouen/4232/koike.htm>)

※小池修一郎 作・演出『カサノヴァ・夢のかたみ』は、1994年、宝塚歌劇団星組で演じられた、ロココ時代を髣髴とさせる、冒険家カサノヴァとポンパドール侯爵夫人のかなわぬ恋物語の歌劇です。

百科全書への想い

百科全書がイタリアでのルネサンスの高まりを起点していることと、〈Art&Science〉のすべてのテーマを「ルネサンスから近代科学まで」としていることが同一であることは、決して偶然ではありません。

百科全書が、啓蒙活動を目的に幅広い知識をすべての人々に向かって発信したものとすれば、〈Art&Science〉の取り組みは、科学に限定するとはいえ、ふつうの人々の「生涯教育」を目的に発信しているといえるからです。「教育」というと、なにか堅苦しいようにも思えますが、「ひとが一生を通じて人生をより楽しく過ごす方法と糧をさがす」とでもおきかえれば、いくらかは身近に感じていただけると思います。

じつは、百科全書の編集活動にかかわったほとんどの人が、そういった身のまわりの人々にとって、より自由で生きやすい術を身につけるために、何を用意したらいいかを考え、それをひとつの体系にまとめました。それを称して「啓蒙運動」「啓蒙思想」といいますが、「啓蒙」とは、未だ自由の「光」の見えない状態に「光を当てる」「光のある世界に自らを啓く」ことを意味します。その糧に、百科全書を用意しようというのです。

パトロンとなったポンパドール侯爵夫人も、自らの出生に躊躇することなく、リベラルな官僚を身近において、思うにまかせた政治を大胆にすすめました。これまで見てきた時代の流れの中でも、ガリレオやデカルトのような科学の変革を起こした人々のまわりには必ず支援者が存在しているのですが、こういった「パトロン」と呼ばれる存在は文化の振興や科学の発展にとって、欠かせないものだったのです。だがしかし、時代そのものを動かしたのは、そういった一部のパトロンの思惑ではなく、その時代の流れに遭遇した科学者や思想家本人であり、それに影響を受けたまわりの人びとであったことを忘れてはならないでしょう。

その証拠に、隣国のイギリスでは、パトロンからの支配からも自由になろうと、科学者や思想家たちが小さな集まり：ソサイアティをつくって、その集団の中心に、ロイヤル・ソサイアティを置きました。これは、「ロイヤル」と名がついていますが、国王は代表者ではなく、選任によって代表が決まる「科学者・文化人組合」の許認可者にすぎませんでした。

ポンパドール侯爵夫人は、そのことも十分承知の上で、イギリスのそういったソサイアティの参加者とも知的な親交をもっていました。たとえば、アメリカで活動をしていたベンジャミン・フランクリンさえもその対象だったといわれています。

ところで、支援者の「支援」とはどのようなものだったのでしょうか。

1752年1月、『百科全書』の第2巻が出版されます。しかし、翌月、イエズス会士の一部と王子の家庭教師たちが宮廷でのロビー活動を起し、国王による出版停止処分が下されてしまいます。「百科全書が、王権を倒し、自立と反抗の精神を植え付け、誤謬と退廃、無宗教と不信仰の基礎を与える」というのです。

しかし、だがしかし、百科全書の支援者たちもだまっではいませんでした。出版統制局長、その統制に令を出すポンパドール侯爵夫人、その第一の従者の外務大臣です。その月内にデイドロと出版者の連合に対して原稿の提出が命令され、デイドロは必要書類一切を出版統制局長に提出しました。そして、それ以後のすべての項目をパリ大学神学部の博士に検閲させることを条件に、続刊の許可が下りたのです。その後も、ポンパドール侯爵夫人たちの保護のもとに刊行が継続されたのです⁽⁵⁾。

(5) 中川久定 著『啓蒙の世紀の光の下で-デイドロと『百科全書』-』岩波書店(1994)

百科全書運動の年譜

2009.11.22 喜多村 作成

2010.1.24

改訂

年	啓蒙史項目	社会史項目	科学史項目
1715			テーラー: 級数展開
1716			
1717			
1718			ハリー: 恒星の固有運動
1719		デフォー『ロビンソンクルーソー』海軍小説・海運業の株式会社乱立	
1720	ライプニッツ『単子論』		ドモアブル: 複素数
1721	モンテスキュー『ペルシャ人の手紙』		ジャンヌ・アントワネット・ポアン 誕生
1722			
1723			
1724			ファーレンハイト: 温度計目盛 (degF)
1725			
1726			
1727			
1728	Arts & Sciences百科事典 英 チェンバース		ベーリング海峡発見
1729			
1730			
1731		徳川宗春 名古屋城入城	
1732			
1733			
1734	ヴォルテール『哲学書簡』		
1735			リンネ『博物分類』
1736			
1737		フィレンチェ メディチ家断絶	
1738			ベルヌーイ: 流体力学
1739			
1740			
1741			
1742			セルシウス: 温度計目盛 (degC)
1743			ダランベール: ダランベールの定理
1744			
1745	arts et des sciences	仏訳 ジョン・ミルス [*] ブルトン ジャンポール・ド・マルヴ [*]	ポンパドール侯爵夫人を名乗る
1746	ディドロ『哲学的思索』		
1747			
1748	ラ・メトリ『人間機械論』	モンテスキュー『法の精神』	
1749			ビュフォン『博物誌』
1750			フランクリン: 電気の一流体説
1751	百科全書作成開始	ディドロ ダランベール作成	
1752	百科全書第2巻刊行	イエズス会士らにより発行停止するがポンパドール侯爵夫人が復活	
1753		大英博物館 設立	リンネ『植物の種』
1754			
1755	ルソー『人間不平等起源論』		
1756			反プロイセン同盟を結成
1757			
1758	ヒューム『人間悟性論』	理想主義哲学: カント フィヒテ ヘーゲル	
1759			ヴォルフ『発生論』
1760		仏 イエズス会士追放	
1761			ブラック: 比熱・潜熱の発見
1762	ルソー『エミール』		
1763			
1764			ポンパドール侯爵夫人が逝去
1765		ルナ・ソサイアティ: エラスマス・ダーウィン ウェッジウッド [*]	
1766			キャベンディッシュ: 水素の発見
1767	ケネー『重農主義』		
1768		このころ「産業革命」はじまるといわれる	
1769			
1770	ドルバック『自然の体系』	仏 東インド会社解散	
1771			
1772	百科全書作成終了		
1773			
1774		ペスタロッチ: ノイホーフに学校開設 杉田玄白『解体新書』	プリーストリー: 酸素の発見
1775			ラボアジエ: 質量保存の法則
1776	百科全書作成再開	アダム・スミス『国富論』 アメリカ独立宣言	
1777			
1778			
1779			
1780	百科全書作成終了		ガルバーニ: 動物電気の発見
1781	カント『純粋理性批判』		キャベンディッシュ: 水の合成
1782			
1783		パリ条約: イギリスがアメリカの独立承認	
1784			
1785			クーロン: クーロンの法則
1786			
1787			シャルル: 気体のシャルルの法則
1788			
1789		フランス革命	ラボアジエ『化学教科書』